平成 18 年度学術ポータル担当者研修　研修後レポート

受講者名（受講者番号）：　秋山由衣（８）、藤原奏子（9）、八幡圭子（10）
所属機関:　大阪教育大学学務部学術情報課（附属図書館）

(1)発表資料の状況設定

・対象：附属図書館運営委員会（学長指名の 3 教員および各講座 1 教員により構成。全 32 名）
・状況：「大阪教育大学リポジトリ」（仮称）について、学長の承認は得ているが、教員に対して話をするのはこれが初めて。リポジトリについての認知はほとんどない。
・目的：「大阪教育大学リポジトリ」という新しいサービスについて知ってもらう。研究者の協力が不可欠であることを伝え、協力をお願いする。
・開始：18 年度内に、試験公開開始予定

(2)発表内容抄録

はじめに機関リポジトリとはどのような仕組みで、何を登録するか、研究者、大学双方にとってのメリットを挙げて説明する。
次に機関リポジトリの生まれた背景と、世界と国内での現状、本学でも国立情報学研究所の「次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業」に採択され、大学の事業として立ち上げることを説明する。
最後に、リポジトリ構築にあたって問題となる、著作権許諾について説明し、先生方には年度内の試験公開に向けて、著者最終原稿の保存、提供、講座内の他の先生方への周知をお願いしている。

【講師からの助言】
リポジトリ運用に関する日程、担当者を明確にするとよい。

【研修発表との改定部分】
・語句の修正　学術情報の一元管理　→　管理という言葉を嫌う先生もいるため、把握と言い換えた。
・世界と日本のリポジトリの現状について、具体例を挙げ、先生方にイメージしてもらいやすいようにした。実際に他大学のリポジトリのページも見てもらうように促した。

(3)リハプレゼンの概要

日時: 2006 年 10 月 25 日　附属図書館運営委員会にて
場所: 附属図書館 3 階会議室
発表者: 八幡
発表対象: 附属図書館運営委員会の委員である先生方。委員は各講座より 1 名選出。
参加人数: 運営委員の先生方　19 名　および　図書館職員（館長=副学長も含む）10 名

・運営委員の 1 議題として、会議の初めに 10-15 分程度時間をもらい、プレゼンと質疑応答を行った。質疑部分は主に課長より回答した。
・学内で広報を行うのはこれが初めて。機関リポジトリの認知度はほとんどないかと予想された。
・システム導入がまだのため、具体的な資料提供のお願いというよりは、機関リポジトリの概要を知ってもらい、今後の協力を呼びかけ、またこれから論文を発表されるさいはストックしてほしいというお願いをする意図。また、反応から、今後とくに協力していただけ

そうな先生を見つけたい、という意図も。

(4)リハプレゼンへの反響
→アンケート（アンケート用紙と結果のまとめをファイルは別途添付）

・アンケート結果によれば、おおむね、前向きな感想が寄せられた。
・事前の予想通り、機関リポジトリについて「今回初めて聞いた」という回答が、19 回収したうちの、約半数の 9 あったが、（ただし「以前から知っていた」も 6 あり）、今回の説明について「機関リポジトリのイメージがもてた」との回答が 16 あった。
・「登録したい」も 9 回答があり、好評であったが、「電子的な学術情報を持っていない」の回答も 7 あった。
・また、意見として、研究者レベルでは心配していないが、論文がオンラインで簡単に入手できるということが、学生が安易に流用するという傾向に拍車をかけはしないかという、教育面での懸念を示された先生もおられた。

(5)その他（リハプレゼンの感想、現状および今後の予定と希望）

【感想】
・「機関リポジトリを、"大学の知的財産の全体像"を整理（蓄積）・発信・再認識・共有するための装置としてとらえ、推進していく」という館長（副学長）の意図を確認することができた。
・機関リポジトリの例として、北大や広大を挙げたが、同じ教員養成系の大学を挙げてもよかったと思った。（東京学芸大学や兵庫教育大学）とくに、教員養成大学としてのコンテンツの特色（附属学校や「教育実践資料」について触れてもよかったと思った。
・　「リポジトリ」の構想には、おおむね好意的・前向きな感想を持ってもらえたようだが、だが「電子的コンテンツを持っていない」との回答も半数あり、また「ぜひ」登録したい、というほどでもない。手間のかかることならしたくない・・との反応もあった。

【現状】　としては
・　附属図書館運営委員会でのプレゼンを終えたものの、システム導入、資料の収集など、具体的に作業が進んでいるわけではなく、困難アリ。機関リポジトリ立ち上げに向けて、とにかく一歩を進めていかなければならない。